

徳之島における稲作と伝統芸能の復興を 通じた地域教育の取り組み

内山 五 織

1. はじめに

本研究の発端は、筆者の出身地、徳之島の誇りである伝統行事が衰退していく様に危機感を感じたことにある。「なぜ伝統行事は衰退していくのか。」「担い手がいらないからなのか?」という自問自答を続けてきた。そして地元に戻ると友人たちとは、幼いころ行った伝統行事の楽しい思い出話が尽きない。しかし島の子どもたちは高校を卒業した後は進学や就職等で島外に出ていく。彼らがもう一度島に戻り、島の担い手となるには徳之島での思い出や体験活動が不可欠であり、そのためには、地区に伝わる伝統行事を衰退させてはいけないこと、そして、子どもたちにそれを伝え、継承していかなければならないというのが筆者の信念となった。そのために伝統行事の根本にある「稲作」をもう一度復活¹させ、集落内で助けあう「ゆいわく」の精神や伝統行事、音楽や舞踊などの伝統芸能を真の意味で再生したいと考えた。

このような思いと経緯から、徳之島の南部にある伊仙町木之香（きのこ）地区において、2010年2月から筆者と集落住民は地元行政のサポートを得ながら、稲作の復活から活動をスタートさせたのである²。

2. タンクサカキ（田の草かき）の実施

田植えが終わると、日に日に稲の生長を実感しつつ見守る毎日となった。春は多くの命が芽吹き生まれる季節でもある。稲の生長と同じくしてたんぼの周りの草たちも一緒に成長し始めた。また、稲の葉を食べるバッタやカメムシなども生まれてくるのである。また徳之島には猛毒の蛇である「ハブ」が生息しているため、安全確保のためのたんぼ周辺の草取りは必須の作業であった。

稲はぐんぐんと成長していった。葉っぱの成長もさることながら、その根っこも進んでいる。田植え唄を歌ってくださった目手久（めてぐ）民謡保存会のM氏からは「タンクサカキ³は横に延びる根を切って、下にのぼすようにすることだ。草が生えてなくてもするんだよ。」と教えられた。このことから、田植えから約1カ月後、あまり根が張りすぎず、また、弱すぎずのころ合いを見計らってタンクサカキが行われた。当日はあいにくの雨であったが、20名近くの参加があり、1時間ほどでその作業は終了した。筆者自身、根を切る感触は初めての経験であり、そのぶつぶつという切れる音が体中から伝わってくることに感動した。またこのとき、昭和40年代まで使用していたタンクサカキ用の機械も目手久民謡保存会の方々から提供いただいた。参加者からは「お米が作られなくなって大分たつのに、このような機械がまだ

¹ 徳之島ではもともと稲作が行われており、島の伝統芸能は稲作の豊作祈願や収穫感謝などに起源するものがほとんどであるが、17世紀以降の薩摩藩支配時代にサトウキビ栽培が強要されたため、現在では水田はきわめて少ない。稲作と伝統芸能が密接不可分なものであることが、今回の実践の発端ともなった。

² 活動の始まりから田植えまでの活動においては、「同志社政策科学研究」第12巻1号に記述した。今回は活動の後半部分を報告する。

³ たんぼの草取りのこと。徳之島の方言（伊仙方面）ではタンクサカキという。

残っていたのか。すごいね～」という声が聞かれた。確かに筆者自身も町の資料館でしか見たことがない。思いのある伝承者が亡くなってしまえば、その技も道具も存在することはできなかったはずである。この活動のタイムリミットは知らぬ間に近づいていたと考えられ、この取り組みは今だからこそできたのではないかと考えた1日であった。



図1 タンクサカキの様子（T氏撮影）

3. たんぼの自然観察会

春は生き物たちの誕生の季節である。それらの生息地として、たんぼは絶好の場所であった。春の柔かい草花は昆虫の餌となり、その昆虫を目当てにたくさんの野鳥が訪れる。筆者自身、稲作をしていなければ見ることのなかった昆虫や鳥などがいることを知り、早速子どもたちに体験してほしいと考えた。

6月は梅雨の真っ最中であるにも関わらず、観察会当日は天気にも恵まれた。子どもたちは生き物を捕まえては名前を調べに何度も繰り返したんぼの周りを走り回っていた。徳之島の昆虫や植物に詳しい講師の方のおかげでトンボだけでも10種類以上が生息していることがわかった。

また参加者からは「普段見慣れている草が実は食べられるなんて知らなかった」という言葉や、簡単な調理でもおいしく食べられるということを知り、自然の恵みと先人の知恵に驚いたという声が多数聞かれた。つまり島の人々でも自然とのつながりが薄いということや、自然とともに生きる知恵の伝承がなされていないことがわかる。しかしその一方で多くの人々が人と人、人と自然とのつながりが大切だと感じており、またその機会を欲しているということも確認することができた。



図2 たんぼの自然観察会（筆者撮影）



図3 食べられる野草のお話の様子（筆者撮影）

4. 稲刈りと脱穀

稲刈り当日は申し分ない天気に恵まれ、朝早くからの作業にも関わらず多くの参加があった。稲刈りの2週間前からたんぼの水抜きを行っていたのだが、水はけが悪く、泥の中を稲刈りすることになった。山に近い地域では水はけの問題で、このような状態で稲刈りをするのがあったという話を以前聞いたことがあった。先人の大変さを身にしみて感じた瞬間を大勢の方が体験した。

稲刈りでは3班に分かれ、次々と稲を刈り取ってもらう先行隊、子どもたちに稲刈りの方法を教えてもらう経験者たち、その他の人には、刈り取った稲を一束にし、竹の竿に干していくという作業をしてもらった。

続いて脱穀の作業はもみの乾き具合により稲刈りから1週間後に開催した。隣町の徳之島町母間地区の住民から古い脱穀機を借りて行った。昭和40年代まで現役で使用されていた足踏み脱穀機や手回し式の唐蓑（とうみ）は、保存状態が非常によく、今なお現役で使用することができたのである。これらの機材を使用し、4時間かけて脱穀作業を終えることができた。



図4 稲刈りの様子（筆者撮影）



図5 唐菰(とうもろこし)作業の様子（筆者撮影）

5. 「むちたぼれ」の開催

「むちたぼれ」⁴とは、徳之島の伊仙町と徳之島町の一部に伝わる稲の豊作祈願である。その起源は残っている文献などがいないため特定はできないが、稲作起源の行事であることは、行事で歌われる歌詞からも推測することができる。

今年は9月19日に行われることとなった。その日の午前中には集落で作ったもち米で、伝統行事でふるまわれる「かしやむち」⁵を作るワークショップを行った。参加者は木之香集落婦人会と伊仙町内外から総勢20名の親子が参加した。筆者自身も食べた事はあっても作り方は知らず、伝統行事にかかせない伝統食の作り方を学んだ。

夕方になると区長の集落放送の合図により、生活館にはぞろぞろと住民が集まってきた。今回、筆者はいつもの伝統行事とは違う仕掛けを試みた。集落外の人々をこの行事に参加させるというものである。今まで集落民だけで行って

きた行事は過疎化の影響でその参加人数が少なく、こじんまりとしたものであった。そこに木之香集落以外の住民の活気を合わせることで、行事自体を盛り上げていこうとしたのである。この試みは功を奏し、集落外からは30名以上の参加があったことで、大変な盛り上がりを見せた。特に隣の校区である鹿浦小学校の校長をはじめとした教員の方々や生徒の参加により、伝統行事を通じた子どもたちの交流が生まれたのである。近隣の地域に住みながら、あまり交流のない二つの校区の子どもたちが同じ共通体験を行えたことは、今後の関係性の構築に大きな役割を持つものになるのではないかと期待している。

そんな中、筆者が一番心に残ったことといえば、小学校高学年くらいの女の子が三味線を弾いている筆者に「三味線を自分も弾いてみたい」と自ら話してきたことである。筆者は簡単な弾き方だけを教え、彼女に行事後半の三味線を担当してもらった。すると、それを見ていた子どもたちが、「自分も弾いてみたい」と次々と名乗りを挙げてきたのだ。集落行事で使用される三味線や太鼓などの楽器はすべての住民ができるものでなく、ある特定のできる者が担当するというようになっていた。その為、従来の集落では楽器担当はいわゆる行事の「花形」であり、楽器が弾ける＝かっこいいという対象になりやすい。興味を持った一人が今回筆者に声をかけ、弾いてみたところ、結果、他の子どもたちがその姿を見て、日ごろ触ることのない楽器に興味をもったのではないかと。また奄美地域では、島唄などの伝統芸能は口承伝承や目で見て覚える形式が常識であり、楽譜などはない。以前までは集落に存在する歌や三味線の上手い人に頼んで教えてもらう、または、弾く姿を見て覚えるという形式が当たり前であった。しかし、現在その状況が可能かといえ、そうではない。いわゆる達人や名人はもはやおらず、後継者もないことが今の集落の現状である。まさに今回の筆者の経験にあるように、女の子が取った行動のような形式が復活したことにより、今後の伝統芸能における後継者育成の可能性が高まっていると言えるのではないかと。

⁴ 伊仙町木之香地区を含む犬田布校区では、昔から「かかし」を五穀豊穡のシンボルとして扱ってきた。かかしに福の神を降臨させ、家々をくまなくまわり、翌年の豊作をいのりという行事である。

⁵ 粉にしておいたもち米に砂糖をまぜ、徳之島の方言で「かしや」（ゲットウ）という葉っぱにその団子をくるみ、蒸すというもので、その味はほんのり甘く葉っぱの香りがよい伝統的なお菓子である。



図6 むちたぼれの様子1 (筆者撮影)



図7 むちたぼれの様子2 (筆者撮影)

6. おわりに

2010年2月から行った本活動は、木之香集落の住民のみならず他集落の方々や行政関係者を巻き込み、大勢の方々の協力のもとに成り立っている。今回、稲作や伝統行事を通じて多くの方々がつながり、共通した体験を行うことができた。

地域住民が協力して取り組んだ稲作では、特にお年寄りが集落の子どもたちに自らの知恵を伝授し、子どもたちはその大人の姿を見て敬うようになるという関係性を構築していった。これが本来の地域の教育力であり、伝承とは地域教育そのものであると考えられる。

そして伝統行事などのお祭りは、本来、翌年の豊作祈願とつらく苦しい作業をねぎらうものとして発展してきた歴史がある。若年世代にとって農作業が生活から切り離された現状の中で、伝統行事などのお祭りは子どもたちのみならず、大人までも楽しい気分にはさせるという効果が発揮されたように思う。結果、この活動を通して伝統行事や芸能は一人ひとりが役割のある、ま

たは輝ける場を創出するばかりでなく、これらの体験が誇りの醸成に効果的であったといえる。そして、集落の子どもたちに多くの体験をさせたいという大人たちが多いということに気付いたという点でも、今回取り組んだ意義を見出すことができたように思う。

今回、大勢の方々の協力により行うことができた活動であったことは前述したが、筆者自身、今回の活動を一言で語るなら迷わず「感謝」という言葉が一番に来るだろう。それは、筆者の一言で始まった本活動に多くの方々が賛同していただいたこと、さらに活動を通して、多くの方が伝統行事を必要だと感じた事、そしてこの活動を最後まで無事に行うことができたことに尽きるからである。この場を借りてご協力いただいた方々に感謝を申しあげたい。また今後も徳之島での生き方やあり方を実践する存在として、またはそのような場を提供していけるように、集落との関わりを継続していきたいと考えている。

参考文献

- 伊仙町誌編さん委員会『伊仙町誌』（伊仙町、1978年）
 相庭和彦『生涯学習から地域教育改革へ』（明石書店、1999年）
 岩崎正弥「場の教育の可能性」岩崎正弥・高野孝子著『場の教育「土地に根ざす学び」の水脈』（農山漁村文化協会、2010年）
 酒井正子『奄美歌掛けのディアローグーあそび・ウワサ・死—』（第一書房、1996年）
 山城千秋『沖縄の「シマ社会」と青年団活動』（エイデル研究所、2007年）
 渡邊洋子「伝統芸能という「共有知」とローカル・アイデンティティの可能性—沖縄県島尻郡南風原町の民俗芸能復活の取り組みを手がかりに—」『〈ローカルな知〉の可能性—もうひとつの生涯学習を求めて—』日本社会教育学会年報編集委員会編（東洋館出版、2008年）
 参考ウェブページ
 厚生労働省ウェブページ
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai09/sankou1.html>